

には作者の名を脱したのであらう。これを吐魯番地方から獲られたパーラギー語の摩尼經典などと比較して、原形に還すことが出来るならば唐代の字音研究の上に、もしくは音譯例の上に面白い結果を見ることが出来る。現にワルトシュミット氏 (E. Waldschmidt) とレンツ (W. Lentz) 氏とは協力して此の研究に従事し、既にこゝに謂ふ第二の偈讚中の三頌だけを還元して居る。<sup>④</sup> 即ち伽路師奥卑唎 伽路師奥補忽 伽路師奥活時雲嚩をミューラー教授の譯出した<sup>⑤</sup>吐魯番出土エストランゲロ字パーラギー語の摩典と比較して *kāōōs o piō kāōōs o puhr, kāōōs o vāō zivondoy, (Holy the Father! Holy the Son! Holy the Living Spirit!)* と読んで居る。もとより此の如きは研究の第一歩たるに過ぎない。同一の方針の下に、更に多くの結果を得らるべきである。石田學士の研究<sup>⑥</sup>された「烏盧洗」という語なども、「烏嚩洗」として第一偈の中に屢々現はれて居るし、十二大慕闍とか七十有二拂多誕とかの特種の名數もまた見えて居る。自分は此の資料との関係の特に深い矢吹博士の手に依つて、早く此の貴重なる殘卷が公刊せられ、天下好學の士の研究を促されんことを切望して止まない。

註① 勿論スタイン氏第三回の探檢の結果によるものは此の中に含まれ得べきではない。

② 第三回大藏會陳列目錄下、第四九—五〇頁。

③ 白鳥博士還曆記念東洋史論叢中に載せらる。

④ *Journal of the Royal Asiatic Society, January 1926, pp. 121-122.*

⑤ *Handschriften-Reste in Estrangelo-Schrift aus Turfan. II. Theil, S. Seq.*

⑥ ③に同じ。

追記 昨年中の *Journal of the Royal Asiatic Society* は或る事情の下に數日前まで見ることを得なかつたが、其の一月號一